

第三篇
第八飛行師團沖繩航空作戰記錄

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

註 本記録は元第八飛行師團作戰參謀石川寛一中佐の有する資料を
基礎として作成せるものなり

第八飛行師團沖繩航空作戰記録目次

- 第一 戰鬥前に於ける彼我形勢の概要
- 第二 戰鬥に影響を及ぼせし天候氣象及地形の狀況
- 第三 交戦せし敵の編制、裝備、戦法等
- 第四 各時期に於ける戰鬥經過並關係各部隊の行動
- 第五 戰鬥後の狀況

第一 戰鬥前に於ける彼我形勢の概要
一 戰鬥前に於ける敵軍の状況

ル比島方面

ロイテ作戰に引續き北部比島の作戰に著手せるマツクアイサー麾下の米軍は三月上旬頃迄比島方面重要飛行場を悉く占領し鋭意末期作戰の準備中なりしが三月中旬頃迄には少くも爆撃約八〇〇機、戰鬥約七〇〇機を下らざる兵力を之等の飛行場に展開し戰爆連合の大編隊を以て隨時臺灣方面に來襲するに至れり

2 中部太平洋方面

二月中旬頃硫黃島作戰に協力中なりしニミッツ麾下の第五八航空部隊の一部を以て三月一日沖繩本島に來襲し主力は五日頃ウシビに歸し次期作戰を準備中なりしが三月十八日再び九州方面に來襲せり此の間中一南、西一部太平洋方面に於ては敵輸送船の動き極めて活潑にして三月十七日頃に至り攻略部隊の逐次マ

ヤナ方面に集結せる状況漸次顯著となりしが遂に三月二十三日動
來有力なる機動部隊は沖繩及宮古島附近に來襲し引續き沖繩本島
二
周邊の諸島嶼に上陸を開始するに至れり

三 戰鬥前に於ける我軍の状況
一 全般の状況
三月中旬頃に於ける敵進攻兵力航空海勢力の判斷附圖第一の如し

前述の如き敵情に鑑み第三十二軍に於ては二月下旬來其の守備を
嚴にし敵の來寇に備ふると共に航空關係に於ても陸海軍中央協定
及東支那海周邊地域に於ける航空作戰指導要領に基き夫々準備に
着手する所ありしが天號航空作戰に於ける戦力の主體とも稱すべ
き特攻兵力の繰出しは中央の努力にも拘らず豫定の如く進捗せず
遂に三月下旬に至るも一隊も南西諸島及臺灣方面に到着せずして
敵を迎ふるに至れり
又第三十二軍の防禦方針の是正問題（北、中飛行場を中核とする

水際決戰思想に變更せしむる件）兵力の増強（前年十一月抽出せ
る兵力の補填）並に地上配備の變更等に關しては前年未來第八飛
行師團の意見具申を直接の契機として大本營、第十方面軍、第三
十二軍間に於て數回に亘り各種の折衝を重ねたるも遂に實現に至
らずして戰鬥開始となりたり

2 師團の状況

師團は航空作戰的見地に基き前年未來屢々第十方面軍並に第三十
二軍に對し沖繩に對する兵力の増強、守備重點の北、中飛行場正
面への轉換等に關し意見を具申（開陳）する所ありしが容易に實
現を見ざりしを以て昭和二十年一月及同二月大本營の主宰に係る
兵棋演習の實施に方り作戰主任參謀を派遣して更めて之等玉璽間
題の解決に關し意見を具申する所あり

又他方面に於ける方面軍の天號航空作戰要領の示す所に基き第六航空
軍と所要の協定を行ひ作戰（戰鬥）の具體的要領を立案すると共
三

に參謀を九州に派遣して新に師團に配屬せられたる特攻隊の掌握
並に推進に勉むる等着々沖繩方面に對する作戰準備を促進しつゝ、
ありしが三月中旬概ね諸隊（中央より配屬せられたる特攻隊を除
く）の作戰準備を完整し所謂「待つゝるを待つゝる」の状態に於て戰
闘開始となる

當時に於ける師團の展開態勢附圖第二其の一乃至其の三の如し

第二 戰闘に影響を及ぼせし天候、氣象及地形の狀況

一、天候、氣象の狀況

本作戰開始の當初は北東季節風のため臺灣北部及東岸一帯天候不良
なりしを以て宜蘭及花蓮港方面の基地使用は氣象の障害を受くるこ
と比較的多かりしも石垣以東下層雲薄く先島群島方面より行ふ攻撃
は大なる支障なく實施することを得たり

爾後四月より五月中旬に到る間は大陸高氣壓と北太平洋高氣壓との
勢力交代門として移動性高氣壓頻繁に發生し其の中南支より東支氣

海を經て臺灣、沖繩方面に移動するに方り作戰地域は長きは十日短
きは兩三日全般に好天持續し高氣壓更に東進して後面となるに及び
次の移動性高氣壓の到來迄一兩日一般に天候悪化するを常とせり
斯の如く氣象の推移は概ね周期的なるも其の變化の頗る迅速なりし
は本期間に於ける特筆すべき特徴なりき

師團は前述の如き氣象の特性と月の中旬より翌月初頭に及ぶ月明期
との關係を考慮し周期的好天の機會を敏速に捕捉して攻撃を實施し
五月中旬頃迄は大なる氣象の障碍に禍せらるゝことなく概ね順調に
戰闘を終始せり特に四月二十二日及二十七日の薄暮及夜間の攻撃は
月明と目的地附近の好天とに恵まれ大なる戰果を收めたり然るに五
月下旬に及び雨西風の勢力漸く増大し不連續線は沖繩、臺灣の線に
停滯十八日以降月末に到る迄連日陰曇なる天候持續し此の間揚子江
下流又は福建省附近に小低氣壓發生して次々に東進す又臺灣附近上
層に南風の侵入顯著にして九州、沖繩間比較的天候良好なる場合と
五

雖も宮古以西は厚き雲層に蔽はれ飛行に困難なる状況を呈し遂に五月二十四日夜決行せられたる義號作戰に策應せんとする師團の出撃企圖は之を放棄するの止むなきに至れり

二 地形の状況

宮古島、沖繩本島間約二百杆の間之を連絡する島嶼の存在せざることとは我が航法特に夜間の航法を誤らしむる原因となり之が爲幾多の犠牲を出せり

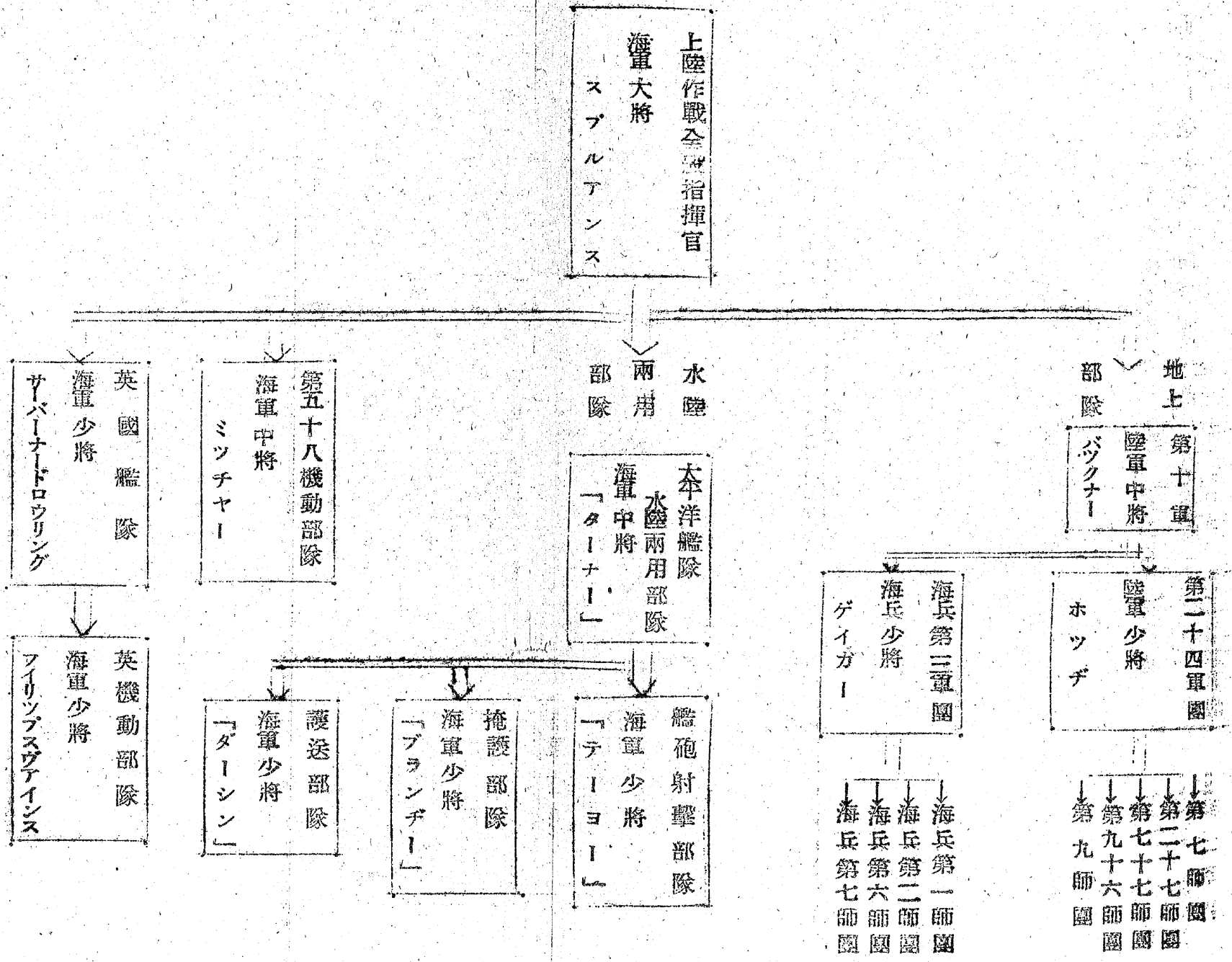
右に反し九州方面よりする島傳ひの進攻は技術劣等なる特攻隊と雖も殆ど誘導の必要なく又臺灣本島よりの攻撃に於ても魚釣島より赤尾嶼を経て久米島に亘る一連の島嶼は我が進攻の爲航法の基準點として比較的有利に利用せられたり

第三 交戦せし敵の編制、裝備、戦法等

一、交戦せし敵兵力、團隊號、將帥の氏名左表の如し

尾嶼を経て久米島に亘る一連の島嶼は我が進攻の爲新法の基礎として比較的有利に利用せられたり

第三 交戦せし敵の編制、裝備、戦法等
 一、交戦せし敵兵力、團隊號、將帥の氏名左表の如し



敵側發表に依る艦船練兵力一四〇〇隻
地上交戦力八乃至一〇個師團

三敵の編制裝備、素質及戦法に關する觀察
ノ米第五十八機動部隊

二月上旬硫黄島攻略作戦前新鋭空母數隻を編入し周到なる準備を
實施し今次沖繩作戦に於て硫黄島作戦一應終結するや引續き急速
整備の後九州方面に來襲爾後沖繩本島上陸作戦に密に協力主とし
て沖繩以北の我が航空撃滅に任じありたるものゝ如し
編制の概要左の如し

指揮官 海軍中將 マーケミツチャイ

第一群 ホーネット、ワスプ、ベニントン（ペロウツド）

第二群 レキシントン、バンコック（サンジャシント）

第三群 バンカーヒル、エセックス、シヤングリラ（カウベンス）

第四群 ヨークタウン、ランドルフ（カボット）

第五群

エンタープライズ、サラトガ、レンヂャー

裝備上従前に比し大なる變化なきも益々戦闘機を主體とし直衛兵力を増強すると共に一部の空母には夜間戦闘機のみを搭載し夜間の上空哨戒に専任せしめ我が特攻及夜間攻撃に對處しありたるものゝ如し
米機動部隊艦載機搭乗員は比較的戦闘意識旺盛なるも一般に技術は良好とは認め難し

2. 米護送空母部隊

從來作戰開始前艦隊の護送哨戒等に任じありしものにして沖繩海戦開始せらるゝや主として英機動部隊と協同し先島方面の我が前進基地制壓に任ぜり
特設空母を以て編成せられありて「第五十一機動部隊」と稱す其の一例左の如し
特設空母 一〇 驅逐艦 一〇

ステイマート、マイ、ツラギ、ベテロトベ、イ、マウンドボイン
ト、スウホニ、イ、マーカー、アイランド、ウエーキアイラン
ド、マカツサルストリート等

3. 英國機動部隊

二月月上旬其の太平洋艦隊編成を喧傳せられ三月月上旬中部太平洋方面に進出しありしが本大作戦開始せらるゝや主として先島群島方面の特攻基地制壓を擔任臺灣に對しても來襲せり
其の攻撃状況等より見るも政略的意圖濃厚にして戦意旺盛ならず

又上空直衛極めて嚴重英國軍の特性を遺憾なく表はしあり
編制の概要左の如し

制式空母 三 ヴィクトリアス、インディファチカブル、インドミタブル
特設空母 二

(五月十日俘虜情報)

3. 敵の執りたる戦法就中特攻對策

敵は數次に亘る我が航空攻撃に依る艦船の損耗に對し種々の對策を講じありしが今次作戰に於ける主なる對策を述べれば左の如し

- (1) 沖繩本島進攻に先立ち慶良間群島を攻略し對空火力配備、電波警戒機の設置等に依り慶良間泊地の防備を強化し本島攻略の據點とせり
- (2) 有力なる機動部隊を以て晝夜我が攻撃基地を制壓すると共に沖繩、(中)飛行場に海兵航空部隊を急速に推進し晝間戰場上空に常時數十機を在空せしめ夜間は夜戦を以て警戒を實施せり
- (3) 有力援護艦艇は晝間は陸岸に近接地上作戰に協力しありたるも夜間は陸岸間西方又は南方海面に後退し我が攻撃を回避せり

以上を敵艦は我が夜間攻撃に對し専ら對空火力に依存せしむる中
期頃より煙幕を展張し我が攻撃を困難ならしむるに努めたり殊
に慶良間泊地は朝夕煙幕を展張するを常とせり

- (5) 敵は多數の船舶損耗に鑑み相當数の工作艦を慶良間の泊地及嘉手納沖附近に進出せしめ毎日十數隻の修理を實施しありたるものゝ如し
- (6) 敵は先島群島の攻撃基地に對し連日時限爆彈を以て我が飛行場使用拘束に勉めたり

第四 各時期に於ける戦闘經過並に關係各部隊の行動

六 戦闘經過要旨

三月二十三日早朝有力なる敵機動部隊沖繩及宮古島に來襲せしを以て師團は直ちに對機動部隊戰闘準備を下令すると共に沖繩方面の搜索力を強化しつゝ待機せしが翌二十四日沖繩本島南部海岸附近に敵十隻より成る有力艦艇現出して我が地上陣地に對し砲撃を開始する

に至りしを以て直ちに作戰即應の態勢に轉移し隨時の攻撃を準備す
次で翌二十五日諸情報を綜合せる結果敵の本格的上陸進攻企圖愈々
顯著となりしを以て師團は在九州の西參謀及在沖繩の神參謀に對し
逐次到着する特攻隊を指揮し沖繩周邊の艦船を攻撃すべきを指示す
ると共に同夜敵機動部隊慶良間群島附近に現出遊戈中なるを偵知せ
しを以て愈々攻撃を開始するに決し翌二十六日早朝一部を以て之を
攻撃す

爾後沖繩本島に對する艦砲射撃逐次熾烈となり敵艦船の動き亦慶良
間群島を中心として愈々活潑化せしも艦船の動向其他全般の状況
より敵の沖繩本島に對する上陸の氣配は比較的僅少なるが如く判断
せられしを以て師團は「敵は先づ沖繩本島周邊の島嶼を攻略したる
後沖繩本島に上陸を企圖する算大なり」と判断し左の如く關係方面
に打電す

八飛師參電第一五六四號（三月三十日）

宛臺灣軍參謀長

敵の沖繩方面に對する上陸の時機に關しては一應三月三十日前後と判
斷し作戰を實行中なりしも最近に於ける敵の動向其他全般の關係等
よりして左記の如き判断亦相當考慮を要するものと思考せらるゝに付
師團としては之に應ずる準備に遺憾なきを期しあり上司に於ても同時
機（現在は月齡上夜間の兵力投入容易なるも四月中旬は殆ど不可能と
なる）に於ける航空戦力發揮に關し速かに善處方配慮相煩度
尙之が爲速かに上司に御願すべき事項左の如し
一 決戦兵力を四月上旬迄に集中特に長距離夜間進攻可能なる機種の増
強

二 輸送部其他を以てする夜間空輸に依る一人員及飛行機一南西諸島
への貼付兵力の増強
三 右に伴ふ後方準備

左記 判決

敵は我が配備の薄弱なる沖縄本島附近の島嶼に上陸據點を推進したる後四月中旬以降沖縄本島に上陸を開始するならん

理由

(1) 基地航空の威力十分ならざる沖縄方面に於て單なる機動航空のみは依存して猪突放膽なる上陸を實施せんとするは無謀にして縱令政略的意義ありとするも我が陸海軍航空部隊並に海軍水上艦隊の存在する現狀に於ては極めて危険なるのみならず大なる損害を招く結果となるは明にして損害を極度に忌避する敵としては採らざる所なるべし
況んや感受性極めて大なる敵が硫黃島大出血作戰に苦杯を嘗めたる直後斯くの如き作戰を遂行するとは考へられず従つて敵若し速急に沖縄攻略を企圖せんとせば犠牲を最少限に喰止むる爲にも我が特攻

並に海軍水上艦隊を事前に處理する爲特殊の上陸方法を考案するの要あり

(2) 敵の九州及臺灣方面に對する空襲並に沖縄本島に對する艦砲射撃の現況比較的低調なるは敵軍主力の本格的上陸進攻未だ切迫しあらざる證左にして現に慶良間列島に於ける敵の行動へ一部の人員兵器資材糧秣等を揚陸し爾後の本格的上陸の泊地としての諸準備ならんは後方補給の長遠なる敵が上陸作戰に危氣なからしむる爲採用すべき當然の處置なり

(3) 沖縄に對する企圖は空海基地の推進にあるべく慶良間列島は船團の泊地に適し而も豫想上陸地點たる由飛行場に近く爾後の上陸效程増大の爲にも將亦上陸用各種資材並に糧秣等の集積準備等の爲にも其の價值甚大なり
而して之等の糧秣資材等は假りに撃沈せられたる場合に於ても人員の被害は微々たるものにして自然特攻對策となり得べし

又基地の設定容易なる小島嶼を先づ占領し四月中旬以降戦闘機の基地を推進することも絶無とは断じ難し

(4) 其の他現に活動中の機動部隊の本格的作戰準備並に敵後方の状況等よりして前記慶良間方面に對する長期滲透的準備の完整等とも關聯し四月中旬以降沖繩本島に對する本格的上陸を開始の算大なるものと判断す

通電先 灣 参考 參本、靖、球

此の頃電報の傍受等により「第六航空軍及聯合艦隊主力は依然攻撃準備中にして主力の攻撃開始は更に數日間遅延の見込なる」を承知せしを以て「」は過早の兵力投入を戒め適宜兵力の投入を抑制しつつ好機を捕捉して行ふ一部の攻撃を續行す然るに四月一日敵は沖繩島、中兩飛行場西方海岸に本格的上陸を開始せしを以て師團は豫準備せる所に基き直ちに主力の攻撃を開始せり

斯くて攻撃を續行すること約二ヶ月餘六月上旬に至り沖繩本島方面戦勢の露趨自ら明瞭となれると宮古島方面に對する敵の進攻企圖逐次濃化の状況を呈し來れるを以て師團は一應沖繩方面に對する攻撃を中止し主として戦力の充實を圖りつゝ敵の新企圖に備ふ

二第一期 (自三月二十六日 至四月十一日)

人 戦闘經過の概要

師團は三月二十六日第九飛行團をして誠第十七飛行隊を基幹とする部隊を以て慶良間群島附近の敵機動部隊を攻撃せしめたるを皮切りとし主力を以て臺灣本島及先島列島より「特攻並に軍偵隊の反復爆撃」一部「九州に逐次集結せる特攻兵力」を以て九州方面より「第一回特攻は三月二十七日」南北相呼應して攻撃を開始し緒戦勢頭敵に甚大なる損害を與へ其の心膽を寒からしめたり
次で四月一日敵は沖繩本島に對し本格的上陸を開始せしも我が地上兵團の抵抗見るべきものなく而も第六航空軍及海軍航空部隊主

力未だ攻撃を開始するに至らざりしを以て敵上陸部隊は何等の損害を蒙ることなく無血上陸に成功し忽ち沖繩島、中兩飛行場は敵の占據する所となりしが第三十二軍に於ては未だ反撃の模様なし茲に於て師團は「此儘にして荏苒時日を経過せんか眞に憂ふべき事態に立至るべき」は必至なりと判断し四月三日爾後の作戰に關する師團の見解を左の如く方面軍に開陳すると共に全般作戰の見地より第三十二軍の即時反撃の必要なる所以を強調し意見を具申する所あり

宛第十方面軍參謀長

八飛師參電第一七五五號

一、沖繩島に對する上陸當初の戰果芳しからず遂に憂ふべき戰況に立到らしめたるは師團の責任にして寔に申譯なし
二、併し乍ら現下の戰勢を觀察するに敵の兵力僅かに二師團内外に過ぎず後方補給路が長遠なるにも拘らず敵水上艦艇（空母を含む）の損

害甚大なるは蓋ふべからざる事實にして上陸兵團の支援に任ずべき基地航空の根據未だ安定しあらざるは我の乘ずべき好機なり而して此の好機は旬日を出でずして去らんとす即ち上陸せる敵を攻撃し沖繩島、中兩飛行場の使用を拘束するは大局に於ける作戰目的を達成すると共に敵に大出血を強要する爲絕對の要件なり師團は未だ兵力の半数以上を保有しあり靖亦然るべし球にして此の機を逸せず進で積極的攻勢を採らんか陸海空戦力發揮の好機亦生起繼續して戦局の打開必ずしも不可能に非ざるべし球と雖も此の戦機を捕捉することなく易々として眼前に敵航空機塞の建設を許し神州を醜翼の蹂躪に委し自ら沖繩の一隅に健在するも瓦全の他何等の意義を有せず萬一戦局打開に到らずとするも玉碎に至る間少くも數ヶ月我が各種戦力發揮の機会を爲するを得て敵に大出血を強要し國體護持に寄與する所極めて大なるべし

航空作戦的見地に基き戦機を逸せんことを虞れ右敢て愚見を開陳す

通電先 灣

参考

參本

然るに其の後間もなく第三十二軍は独自の立場より反撃を決意せし
る旨の電報及方面軍の第三十二軍に對する反撃命令並に聯合艦隊
（第六航空軍）の四月六日以後の本格的攻撃に關する通報に接し
たるを以て師團は萬難を排して之に協力するに決し所要の部署を
爲す（作命甲第二百四十二號）と共に爾後の攻撃目標は第三十二
軍よりの要求もあり主として大型艦艇に變更せり斯くて師團は聯
合艦隊（第六航空軍）と協同し第三十二軍の反撃に密に策應して
連續不斷の攻撃を續行せしも第三十二軍は間もなく反撃を中止す
るに至りしを以て爾後師團は主として航空部隊独自の見地に基き
攻撃を實施するに至れり

2. 各部隊の戦闘經過

1. 第九飛行團

第九飛行團は二月中旬以降先島群島に展開し作戦準備中なり
しが敵進攻の企圖明瞭となるや臺飛作命甲第二百一十一號によ
り新に飛行第二十四戰隊、誠第百十五、第百十六飛行隊、獨
立飛行第四十一中隊を其の指揮下に入らしめらる（三月二十
五日發令）當時に於ける軍隊區分（指孤内は展開地）左の如
し

第九飛行團

長 柳本大佐

第九飛行團司令部 (石垣)

飛行第二十四戰隊 (宮古)

獨立飛行第二十三中隊 (石垣)

獨立飛行第四十一中隊 (宮古)

第十七飛行隊 (石垣)